

ママ、お手てが切れちゃうよ

「ママ、お手てが切れちゃうよ」

手のひらに乗せた豆腐に包丁を入れようとする、幼稚園児の息子がそう言ってぼろぼろ涙をこぼしました。コロナで息子は園が休み、私もしばらくパートの仕事に來なくてよいと言われたその日、二人きりの昼食に味噌汁を作ろうとしていたことでした。

「大丈夫。お手てまでは切れないよ」

私が何度説明しても息子は合点がいけない様子。私のエプロンの端をつかんで、大粒の涙が真っ赤な頬に伝っています。私は手の上で豆腐を切るのをあきらめ、まな板の上で切ってから鍋に投入。おかげで豆腐の角は崩れ、汁のなかで無残にも破片が浮いています。豆腐の美味しさは、そのすっきりとした切り口にあると思っている私は、すんでのところ舌打ちしそうになりかけましたが、ふと、こう思い直しました。

(私のために誰かが涙を流して心配してくれる。大人になってからこんなことがあったらだろうか)

私はさっきまで煩わしいと思っていた息子をぎゅうぎゅう抱きしめていました。

思えば私は、それまで息子に、自分が料理をしている姿をほとんど見せたことがなかったのです。私は朝から晩までパートに行っています。朝食は息子が寝ている間に作ってしまうし、昼は園で給食、夕食はたいてい母が来て作り置きしてくれたもので済ませます。今回、たまたまコロナで互いが家にいる機会があり、こうして息子に私の調理風景を見せることになったのです。もしステイホーム期間がなければ、「ママ、お手てが切れちゃうよ」と身も世もなく泣き叫ぶ息子の姿は見られなかったことでしょう。

愛顔といえば、普通は、笑顔を思い浮かべるかもしれませんが、私にとっての愛顔は、自分のことを心から心配して涙をこぼす息子の泣き顔です。その日食べた、豆腐が崩れた味噌汁は、おいしかった。

